

こんな時は



救急車

お酒をイッキに飲んで、こんな症状がでてきた時には要注意!!

1. 意識がない。
ゆすっても、つねっても起きない。
2. 全身が冷えきっている。
3. 呼吸が変。
ゆっくりで途切れたり、浅くて早い。
4. 大量の血や、食物を吐いている。
5. 失禁している。

不幸にして、こんな症状がでたら、
すぐ救急車を呼びましょう。

恐ろしいイッキ飲み



監修 厚生省保健医療局精神保健課

社団法人 アルコール健康医学協会

1. 未成年者飲酒禁止法

わが国には未成年者飲酒禁止法という法律があることはみなさんご存じだと思います。しかし、最近、中・高校生や大学新入生コンパ等で、本来違法行為である未成年者の飲酒が半ば公然と行われているのが現状です。

お酒はアルコールを主成分とする立派な薬物です。十代は心と体の基本を形づくる重要な時期ですが、発育途中の飲酒は心身の発達に悪影響を及ぼします。未成年者の飲酒が法律で禁止されているのはこのためです。



ひところ「イッキ、イッキ。」の掛け声とともに大量のお酒を飲み干す若者を中心としたイッキ飲みのブームがありました。一時下火になったかに見えましたが、最近になってまた酒場などでこのイッキ飲みをする人々を多く見かけるようになったと思いませんか？

ここでは若者の間にみられるこの危険なイッキ飲みについて解説しましょう。

6. イッキ飲みの強要は殺人行為

今まで述べてきた通り、イッキ飲みや、飲めない人へお酒を強要すると、急性アルコール中毒から死にもつながる可能性があります。お酒をあまり飲んだことのない人や飲めない人にイッキ、イッキと酒を飲ませ、急性中毒を起こさせた場合、強要した人は、過失傷害罪、または過失致死罪にも問われかねません。何かが起こってからでは遅いのです。お酒の無理じいやイッキ飲みは絶対にやめましょう。



2. 若者と飲酒



若者は身体的に成長過程にあります。「百薬の長」とも呼ばれるお酒も、飲み方を間違えると思いがけない危険をもたらします。お酒を飲み慣れない人では、アルコールを分解する酵素の働きが弱く、分解される速度も遅いとされています。したがって、お酒を飲み慣れない若者が飲酒をすれば当然酔いは深くなり、身体の発育にも悪影響を与えます。

それに、まだ自分の適量を知らない若者が雰囲気や飲まれてイッキ飲みをすることで急性アルコール中毒になり、救急車の世話になるといった例が後を絶ちません。

5. 半数の人は、お酒に弱い体質

お酒は肝臓の酵素で分解されます。日本人の約半数はその酵素の一部が欠けており、生れながらにしてお酒に弱い体質なのです。そういう人がお酒を飲むと、すぐ赤くなったり、胸がドキドキしたり、気持ちが悪くなったりします。こういう人にお酒をすすめるのはいけません。ましてイッキ飲みの強要は苦痛の無理じいでしかありません。嫌がることをすることは、セク・ハラならぬ、アル・ハラです。



4. イッキ飲みは死につながる



酔い、それはお酒による麻酔効果の現われです。飲むほどにその酔いは深くなり最後には昏睡へと進みます。ゆっくり飲んでいけばその深さを自覚できますが、イッキに飲んだ時はアツというまに昏睡状態へ進み、全身麻酔と同じ状態になります。それがさらに進むと呼吸も麻痺して死に至ります。何人もこの急性アルコール中毒で亡くなっているのです。

3. イッキ飲みと急性アルコール中毒



口から飲んだお酒(アルコール)は、胃や小腸から吸収され、血液に入り全身に行き渡ります。飲酒によって血液中のアルコール濃度が最高に達するまでには通常30分～1時間かかります。この時酔酩度(酔いの深さ)は最も深くなります。ゆっくり飲んでいけば「酔い」という身体の警告サインを感じながら進めますが、イッキに飲めばこの警告を感じる前にお酒は全身にまわっており、気づいた時には予想以上の深酔いをしてることになります。

左に示した図は東京消防庁が扱った急性アルコール中毒による救急搬送者の年齢、性別の分布です。

20歳代までの若者がその半数以上を占めていることがわかります。中には急性アルコール中毒のために命を落とす例もあり、軽症の例は救急活動の大きな負担になることも考えられます。

●急性アルコール中毒による搬送者数(東京都内/1991年)

